

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320053

研究課題名(和文)江戸期以前の番外謡曲本文校訂に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Research of editing Bangai Utaibon text in the late Muromachi period

研究代表者

竹本 幹夫 (TAKEMOTO, MIKIO)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90138181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：江戸初期以前に成立した非現行謡曲(番外曲)全曲245曲を翻刻・校訂し、それを踏まえ謡曲校訂の理論を確立し、モデルとなる校訂本文を作成するのが、本研究の目的である。曲ごとに複数の写本を翻刻したため、当初の245曲に67曲及ばず、ナ行までの178曲となった。未了分は今後も翻刻作業を継続する。この作業の過程で、謡曲本文の遡源的研究の可能性に想到した。これにより謡曲本文がどのように系統化したかのパターン分析の目安を得た。これは世阿弥自筆能本と現存謡本諸本との関係性の想定論に基づく理論であるが、世阿弥自筆本が存在しない非現行曲についても、ある程度の想定をすることが、曲ごとに可能となった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to establish the methodology of editing Youkyoku by producing the exemplar through editing all the 245 “Bangai Utaibon.” The first 178 songs, from a-gyo through na-gyo, are completed and the balance 67 songs will follow.

As some linguistic rules were found through the course of action, the stemmatics of each Noh songs turned out to be rather obvious, respectively. The theory itself is based upon the surmise after comparing Zeami's autograph manuscripts and the extant manuscripts of Utaibon came out later. Interestingly, the same rule would also apply, to some extent, to those songs that Zeami's autograph had already been lost.

研究分野：日本文学

キーワード：謡本 謡曲 番外曲 廃曲 能楽 能本 本文校訂 世阿弥

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、平成 13 年度～16 年度科学研究費基盤研究 A「能テキストの網羅的調査・系統分類と『謡曲大成』の作成」、同 17 年度～20 年度科学研究費基盤研究 A「室町期成立番外謡本の網羅的調査・系統分類と『謡曲大成』の作成」において、全国規模の謡本収集・整理の共同研究を行い、収集曲のリスト化と翻刻を行った。このうち、現行曲約 250 曲については、すでに校訂・注釈の作業に入っており、現行謡本に基づきつつ、古本との校異を示した校注・現代語訳・評釈付きの本文が近い将来、順次公刊される予定である（勉強出版『現代謡曲集成』）。また番外謡曲については、世阿弥作品を中心に、番外曲を含む謡曲の新しい校訂本文が注釈付きで、数年内に公刊される予定である（岩波書店『世阿弥全集』）。さらに現存謡曲 600 曲弱については、すでに申請者が監修した『能・狂言必携』（1995 年学燈社）所収「能作品全覧」で網羅的調査を行っているが、これをさらに拡充した現存謡曲解題を含む能楽の総合事典の刊行を予定しており、これも数年内の刊行を見込んでいる（朝倉書店『能楽大事典』）。これらの編纂は、いずれも上記二課題の研究分担者・協力者と共に申請者が監修して行うものであり、そのすべてが実質的に上記二課題の研究成果の性格を含んでいる。しかしこれらの研究成果に加えて、現在の能界の正式所演曲ではない、番外謡曲の校訂本文集が、将来の能楽研究のためには必須である。

(2) 謡曲研究自体は、今や番外曲に視野を広げた研究が主流となりつつある。そのためには、対象となる番外曲校訂本文の作成が前提となるが、これは能楽の専門研究者だけの特殊な技術に属する。このことは謡曲研究を、門外の文学研究者が容易には近付きがたい特殊分野のごとくに思わせ、能が室町時代を代表する文芸であるにも関わらず、文学史の外縁部にしか位置付けられていない結果を生んでいる。謡曲本文は全国の大名家旧蔵文書を中心に多数が存在するが、申請者は過去 10 年以上の研究を通じて、既知の文献については、収集をほぼ完了した。ただしその全体の系統化・体系化は今後の課題に属しており、本研究では主要諸本の翻刻作業を通じてそれをほぼ完成させることをめざす。そのことにより研究方法の利便性が拡大し、能楽研究に参画する研究者が増大して、従来以上に研究が進展することが期待される。

## 2. 研究の目的

(1) 現在では上演されることのない番外謡曲約 200 番について、翻刻・校訂して校訂本文を作成する。謡曲は現在、現行曲として約 250 番が現存し、番外曲も含めて 500 番以上ある江戸期以前成立の古曲のほとんどはすでに翻刻されているが、校注が行われたのはそのごく一部に過ぎず、その他は特定伝本の

翻刻のみである。現行曲の場合は、今後すぐれた校訂が世に問われる可能性があるが、番外曲の場合は学界全体を通じ、体系的・総合的な諸本校合と本文校訂が行われる予定はない。本研究は今後そうした大規模研究を実施する際の基礎作業として、すでに収集している謡曲本文に加えて新たな未収分を収集し、番外曲の諸伝本の翻刻を行うものである。また合わせて、謡曲の本文校訂のあり方を模索すべく、何曲かについてそれぞれ方針を異にする校訂本文を試作する。

(2) これまで謡曲校訂は人気現行曲に傾きがちであったが、謡曲研究には、文学的達成度の高い作品のみならず、すそ野を形成する番外曲までも視野に入れることが必須である。また従来の謡曲校訂本文は、現行演出重視か古態本文重視かの決定を見ておらず、他の古典本文に比して、不徹底にならざるを得ない面が多くある。例えば岩波書店古典大系『謡曲集』（旧大系）は、最古本を底本としながら文字遣いは現行謡本に準じ、ト書き的な注記も現行演出を用いていて、古本尊重主義と整合しない。これを改善する試みは前掲の『世阿弥全集』で行われる予定ながら、あくまで世阿弥作品に限定するという特殊な条件の下でのモデルケースを示すにとどまる。世阿弥時代以後の、世阿弥の作風ではない能については、世阿弥の場合とは異なる本文復元上の工夫が必要となる。本研究はこれまでの謡曲本文研究の限界を打破し、能文学の新たな文学史的位置付けを可能にする研究を目指しており、複数のモデルケースを作成するのも実験的な意味合いからである。そうした視点の総合的・体系的研究は今まで例がない。網羅的な謡曲注釈作業がこれまで実現されなかったことや、書籍としての社会性を勘案すると現行台本にこだわらざるを得ないことなどが、その大きな原因であった。将来、理論的により徹底した謡曲本文を提供するための準備として行う本研究は、これまでいまだに発想されたことのない視点に基づくものであり、きわめて独創的である上に、謡曲の影響を受けた他分野に与えるインパクトも大きい。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は研究期間を 4 年間とし、補足的な資料調査収集、『国書総目録』能の本を基本情報としてそこに追加分を含めた曲目別の番外謡本諸本所在データベースの作成、作品ごとの主要諸本翻刻、校訂本文のモデル作成を行うことを目標とする。

(2) 初年度は力行までの諸本翻刻とデータベース基本設計、第 2 年度は夕行まで、第 3 年度はそれ以降の分の翻刻を行い、資料収集は 4 年間を通じて毎年これを実施、データベース化は第 2 年度から順次これを実施する。第 4 年度には翻刻作業の補足と校訂本文のモ

デル作成を中心に行う。

(3) 各年度ごとに成果報告のために、学会での研究発表もしくは論文投稿を予定する。また能楽学会例会でシンポジウムを開催し、作業報告に対する研究者の意見を仰ぐなどして、研究方針を含めた研究方法の見直しを行う。こうした逐次的な成果発表を通じて研究計画の普遍性・妥当性を常に検証することを目指す。

#### 4. 研究成果

(1) 番外謡曲 245 曲の内、178 曲の翻刻を行なった。これらの内から適宜の数曲を選び、校訂本文モデルを作成した。未了の 67 曲については、現在翻刻を進めている。これにより、大半の番外謡本につき、最善本の翻刻が実現した。翻刻曲目は下記の通りである。

ア行 41 曲：愛寿・悪源太・明智討・阿古屋松・朝比奈・朝顔・愛宕空也・安達静・網持・安の字・育王山・生贄・異国退治・石神・磯の童・磯松・韋駄天・一夜天神・巖島・稲舟・稲荷甲・空蝉・優填王・鷯羽・浦上・浦島甲・浦島乙・雲林院甲・延年那須与一・笠搜・逢坂物狂・岡崎甲・岡崎乙・隠岐院・鴛鴦・小手巻・落葉乙・追掛朝比奈・乙平・女沙汰・御坊曾我

カ行 49 曲：かぐや姫・餓鬼・河水・春日神子・葛城天狗・刀・門江口・鐘引・鐘巻・鎌田甲・鎌田乙・神有月・亀井・苺萱・巖洞・漢高祖・祇園沙汰・帰雁・菊水・菊地・北野物狂・木引善光寺・吉備津宮・貴船・経書堂・清重・径山寺・禁野・楠・熊手判官・熊野参・久米仙人・黒川・現在女郎花・現在経政・剣珠・元服曾我・暮・降魔・空也・高野参詣・護法・粉川寺・伍子胥・木玉浮舟・琴・小林・維盛・木幡

サ行 39 曲：犀・西行西住・桜間・佐国・狭衣乙・佐々木・座敷論・座主流・貞任・真田・実方・志賀忠則・信貴山・敷地物狂・櫛塚・櫛天狗・重衡甲・重盛・獅子王・侍従重衡・実検実盛・慈童・信夫・柴田・島廻甲・十番切甲・正儀世守・上人流・浄妙坊・末の松山・鈴木・住吉小尉・住吉物狂・関原与一・千寿寺・先帝・千人伐・素拝桜・孫思バク(近貌)

タ行 40 曲：太子・太施太子・大般若・太平楽・大木・篁・高安の女・滝口・武文・多度津左衛門・鑪重衡・橘甲・橘寺・太刀堀・七夕・玉島川・玉津島・玉鉾・玉水・丹後物狂・親任・親衡・秩父甲・秩父乙・千引の石・長講寺・長兵衛・継信・鼓滝・経盛・鶴次郎・鶴若・丁固松甲・陶淵明・当願暮頭・灯台鬼・十握の剣・鞆・知忠・虎送

ナ行 9 曲：長柄の橋・泣不動・二度の掛・鶏籠田・人形文覚・濡衣・野口判官・野寺・範頼

未了曲は下記の通りである。

ハ行 26 曲：巴園・箱崎・箱根龍神・橋姫・

婆相天・花軍・浜川・浜ならし・馬融・治親・反魂香・飛賀美・常陸帯・櫃切曾我・羊・広元・笛物狂・武王・豊干・伏木曾我・伏見・二見浦・二人神子・布留・北条・堀兼井

マ行 17 曲：舞車・松浦・松浦物狂・真名井原・みうへが嵩・身売・御輿振・水汲・光季・宮川・みわたり・智入自然居士・村山・室住・盲沙汰・守屋・文覚六代

ヤ行 20 曲：八重桜・家持・野干・安犬・八剣・八幡弓・幽霊酒呑童子・行家・雪翁・雪鬼・雪頼朝・融通鞍馬・由良物狂・陽賀・横山・吉野琴・吉野貫之・吉野天狗・吉野詣・寄辺水

ラ行 4 曲：呂后・籠祇王・老子・籠尺八

(2) 上記の翻刻済みの諸曲について、データベースを構築しつつある。曲目所在データベースと本文データベースをリンクさせる作業が難しく、予定よりも遅れているが、可及的早くに完成させ、公開に漕ぎつきたい。

(3) 従来は、世阿弥自筆能本と現存謡本との間には越えがたい断絶があるとされていたが、実際にはそうではなく、観世流もしくは金春流謡本の源流的な祖本と位置付けることが可能となった。これについては、学会発表でのアイデアを論文の形で具体化している。

(4) 上記の発見を通じて、謡本古写本の系統関係を明確に示すことが可能となった。これについては、今後論文を発表の予定である。

(5) 従来は謡曲の本文校訂においては、底本を原文の文字遣いのままに翻刻して誤写を注記の形で訂正するか、古典の正規表現(高校の古典教科書のような本文)を基本に現代の演出情報を付加するかの二通りが主流であったが、この知見を踏まえて、最善本を底本に有力異本で校訂することにより、古態の本文を示すことが可能となった。これにより、複数の作品で実験的な校訂本文を作成した。これに関連して学会発表があるが、そこでの発表内容は近々単行本(分担執筆)として刊行予定である(入稿済み)。

(6) 本研究を通じてたんに謡曲詞章の系統論に止まらない知見を獲得することが出来た。番外謡曲作品を学術的に復元する場合の方法論について明確な方法論が確立出来た。これについては後記学会発表がその具体的な成果の一つであるが、この前提となる作業として、後記論文、学会発表などが関連する。

(7) 論文とは関連する一連の考察、論文と学会発表、論文と学会発表、論文と学会発表は、それぞれ学会発表を論文化したものである。

(8) 学会発表 は、竹本は司会を務めたのみであり、発表した各大学院後期課程学生諸君が番外謡曲に関連する研究発表を行った。その内容は能楽学会紀要『能と狂言』第12号(2014年、PP135)の学会例会ノート欄に略述した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計 8件)

竹本幹夫「猿楽面と神楽面」、『能面を科学する 世界の仮面と演劇』、査読なし、神戸女子大学古典芸能研究センター、2016年、PP207 - 212

竹本幹夫・入口敦志・青柳有利子・江口文恵・近藤弘子・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・木村涼「『葛巻昌興日記』能楽記事稿(天和二年・三年分PP17 - 35、天和四年・貞享元年分PP17 - 34、貞享二年分PP23 - 46)」、査読あり、『演劇研究』37・38・39号、2014・2015・2016年

竹本幹夫「南北朝期・室町期の文学と諸芸能」(シンポジウム報告)、査読なし、『中世文学』60号、2015年、PP1 - 9

竹本幹夫、「History of Nōgaku 能楽の歴史」‘Theatre of dreams, theatre of play - Nō and Kyōgen in Japan’ Art Gallery of New South Wales 査読なし、2014年、PP17 - 23、

竹本幹夫「世阿弥自筆能本をめぐる諸問題 謡本との断絶を中心に」、査読なし、『演劇と演劇性』、2014年、PP3 - 11

竹本幹夫「能の構造と技法における様式の成立をめくって」、査読あり『国文学研究』169集、2013年、PP25 - 37

竹本幹夫「『申楽談儀』面のこと をめぐって」、査読なし、『ユーラシアにおける仮面文化の研究』、2013年、PP39 - 48

竹本幹夫「観阿弥時代の能」、査読なし『観世』7月号、2013年、PP24 - 33

#### [学会発表](計 9件)

竹本幹夫「能における復元の意義」シンポジウム「古典演劇・伝統演劇の復元的上演はどこまで可能か」、日本演劇学会(法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」との共催企画)法政大学ポアソナードタワー26階スカイホール、東京都千代田区、2015年10月24日

竹本幹夫「“Les textes de nō jamais représentés de l'époque Muromachi” 室町時代の非所演曲のテキストについて」Théâtralité(s) Orient-Occident, Strasbourg, 15, 16 et 17 octobre 2014 Salle des conférences de la MISHA, Université de Strasbourg - UDS, (早稲田大学演劇博物館・ストラスブール大学・アルザス欧州日本学研究所の共催事業「日仏演劇学会」)フランス、2014年10月17日

竹本幹夫「“The Formation and Development of Nō Acting: From the Points of View of Music, Dance and Literature.” 能の演技の形成と展開 文学・舞踊・音楽の各視点から」Performing Japanese Traditions: Temporal and Spatial Reconsideration of Dramatics, Poetics, and Ritual Practices Research Workshop of the Israel Science Foundation, June 15-17, 2014 Tel-Aviv University Gilman Building, Hall 496, イスラエル、2014年6月16日

竹本幹夫「南北朝期・室町期の文学 和歌・連歌・物語と諸芸能の境界(司会と基調講演)」中世文学会春季大会企画シンポジウム、早稲田大学学術情報センター井深ホール、東京都新宿区、2014年5月14日

竹本幹夫「日本の伝統演劇における語り 2: 能の場合」テーマ研究1「近代日本語における声と語り 第3回」舞台芸術の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点、京都造形芸術大学京都芸術劇場 春秋座、京都市、2013年10月4日

竹本幹夫「古典のイメージ 伝統演劇研究の立場から」日本学術会議 文学言語委員会「古典文化と言語」分科会、日本学術会議会議室、東京都港区、2013年9月10日

竹本幹夫「能本三十五番目録の資料性」世阿弥忌セミナー、能楽学会、国立奈良博物館大講堂、2013年8月8日

竹本幹夫(司会)・青柳有利子・井上愛・鶴澤瑞希・ラモーナ・ツアラヌ・深澤希望・マガリ・ビューニユ・柳瀬千穂「番外謡曲校訂をめぐる諸問題」、能楽学会東京例会、2013年3月18日

竹本幹夫、「世阿弥自筆能本をめぐる諸問題 謡本との断絶を中心に」日仏

シンポジウム「演劇と演劇性」 早稲田  
大学小野記念講堂、2012年10月30日

〔図書〕(計 0件)

竹本幹夫『対訳で楽しむ 千手』、檜書  
店、2012年、PP28

竹本幹夫『対訳で楽しむ 三輪』、檜書  
店、2015年、PP26

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹本 幹夫 (Takemoto Mikio)  
早稲田大学・文学学院・教授  
研究者番号：90138181